≪何故、日本は戦ったのか≫

日露戦争編　陸軍の巻　後編

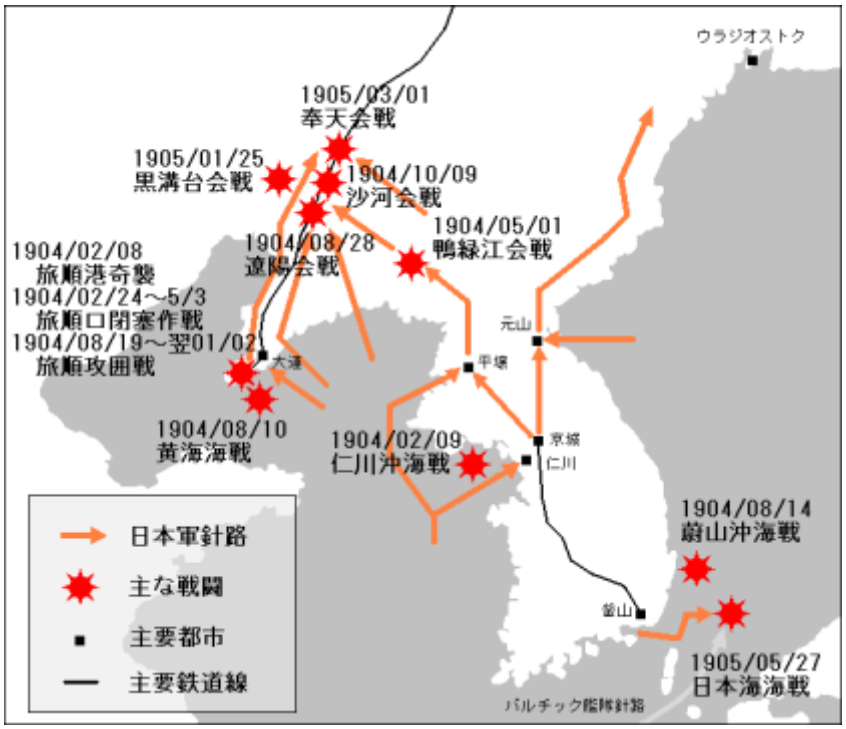
会社が新しい企画や商品開発には不良社員を集め、不良社員が懸命に目的達成のため働く志を持たせられるトップの人選が一番大切だと本で読んだことがあるが、日露戦でもこの強烈な個性を持つ将軍達を如何にこなせるかが成功の鍵だったろうと思う。

大山―児玉のコンビは最高であった。大山は誰よりも児玉を信頼し全てを任せ、桂太郎内閣の内務大臣兼台湾総督、副総理格を捨て二階級も降格して参謀次長になり、大山を支え続けた児玉とのコンビは神が与えたものと言っても過言ではなかろう。ロシアとは兵力・兵器においては差があるが、団結に於いて日本陸軍が勝るなら勝機はあろう。最高の司令官を補佐し、かつ幕僚に於いてもいささかの不満のない参謀長を選ぶとすれば児玉しかないとの声が陸軍には満ちていた。明治日本を支えた上司と部下の多彩な名コンビが、日露戦争では各所で奇跡を起こした。

1904 年 8 月 24 日～9 月 4 日の遼陽の会戦では日本軍１３万人、ロシア 22 万人余で日本軍 22,500 人（ロシア 2 万人）の死傷者を出す激戦だった。ロシアは 9 月 3 日に総退去し、日本軍は翌日に遼陽を占領。補給に手間取り、ロシア軍追撃には至らなかった。クロパトキン満州軍総司令官は雪辱を果たすべく再南下し、遼陽の北部に布陣。日本軍は沙河（さか）で再び会戦となった。日本軍は寒さと、栄養不足、腸チフスと満身創痍の軍隊だった。1 月 25 日ロシアは奉天西南の黒溝台付近で日本軍左翼に攻撃を仕掛けた。日本軍もこれに反撃、小康状態となったが 2 月 20 日大山巌総司令官は総攻撃を指示した。2 月 22 日は新たに朝鮮北部に鴨緑江軍（川村景明司令）が行動を開始。2 月 27 日には左翼の第三軍がロシアの背後を突くかの如く前進を始めた。一種の陽動作戦だったが、クロパトキンはこれにはまり、ロシア軍が右往左往する間に一・二・四軍が中央から攻撃をかけた。ロシア軍は北に向かって退却を始める。3 月 10 日遂に奉天が陥落、大山総司令官の「入城」となる。クロパトキンはロシアでは名将とされたが、一連の戦いで日本軍（特に黒木〉を必要以上に恐れ退却を繰り返し、国内で非難をあびた。

陸戦の最終戦となった奉天の会戦では、日本軍死傷者 2 万 497 人・ロシア 4

万 769 人だった。ロシア軍 36 万 2200 人（砲 1386 門）、日本軍 24 万人（砲 992 門）が激突し全体としては日本軍死傷者 7 万 0028 人、ロシア軍死傷者・行方不明者約 9 万人に及んでいる。



この奇跡の勝利には、ドイツ皇帝ヴイルヘルム二世が「明石元二郎一人で大山が率いる 20 万人に匹敵する戦果」と評価し、裏方として活躍した人や日本の騎兵隊の父、秋山好古の機関銃と有坂銃の威力を用い、機動力を用いた活躍も見逃せない。黒溝台の戦いの功績は特に大きい。

明石　元二郎

《大山　巌》

自らを空しくする訓練で、西郷の託した新国家建設の礎となった武人。「戦は児玉さんにすべてやってもらいもす。負け戦のときは私が出て指揮をとりもす」.....　と。歴戦の猛将を束ねるうえで、大山の人格は必要だった。大山はその有能が故に「己を空しくする」ことに相当の苦労があったのではなかろうか。大山は常に無能を装いトボケ続けた。

《児玉源太郎》

神がその必要性を認めて世に送った稀代の軍政家にして最高の参謀長、「陛下の赤子を無為無策の作戦によっていたずらに死なせてきたのはだれか。その杓子定規な考えの為にいまどれだけの兵が死んできたかと」児玉源太郎曰く。

太平洋戦争の敗戦に際して、時の首相鈴木貫太郎海軍大将は「国民が健在であれば、国家は復興できる」と言った。確かに日本は復興しただろうが「健在」だろうか？　歴史にはその時代の背景と性質が必然として存在するものであるが、明治と平成の現代では比べる尺度が違いすぎている。しかし人間はどうだろう？　幸いにも私達は環境や時代背景が違ったとしても、そこに生きる人間の生き様や進退に深く共感できる想像力を有している。

明治の人達は簡潔で、頑固で、誇り高く、野蛮で、ガサツでとんでもない男達が活躍した時代でもある。児玉や乃木、大山の中に己の心の世界が見える気がする。児玉は明治 39 年 7 月 22 日に世を去った。54 歳の若さだった。児玉の葬儀の日、棺の傍から決して離れない男が居た。乃木希典である。無二の親友も失った六年後、乃木も夫人を伴って自決する。明治の終焉でもあった。
旅順攻略の後、総司令部の乃木に対する批判が高まった時、児玉は叫ぶ！！「それでは問う、あの難攻不落の要塞をおとす極限の苦戦を、乃木以外に勝てる男がいたか！！！」これが日露戦争という戦いであり、明治人はこの様な精神で戦ったのである。日露戦争の種々の出来事は、今みれば皆奇跡としか思えない。また私には全てが感動としか、心の鏡には映らないのである。

これが明治なのであろうか！！

第四軍司令官の野津道貫の気性と気迫に恐れをなした大本営の参謀達は、野津の参謀長に就くことを拒否し、結局娘婿という理由から上原勇作が選ばれた。彼は、秋山好古同様工兵の育成と改革にもっと早くから当たらせていれば、日露戦争に大きく反映されたであろうと評された。そういう逸材であった。島津三州は大隈・薩摩・日向だが、かれは日向出身（上杉鷹山も）で若くして野津道貫の書生となる。当時、野津には幼い娘がいて上原はよく子守をした。彼女は成長するにつれ上原を恋慕していき、後に上原の妻となる。18 歳年下だった。その孫が往年の二枚目スター上原謙であり、加山雄三は曾孫に当たる。少尉の時フランス留学。近代的工兵技術を学んだが「坑道掘進」技術が生かされなかった。それを上原は後々まで悔やんだ。彼は戦後陸軍内にあって、薩摩出身の中心人物になって行く。

海軍の島村速雄や加藤友三郎、そして鈴木貫太郎などが軍縮路線を推し進めたのに対し、陸軍は拡大の一途をたどって行く。その責任の一端は上原にもあるだろう。後に元帥として参謀総長、教育総監、陸軍大臣と三官を歴任した。彼は立見尚文を「東洋随一の戦略家」、同期の秋山好古には「秋山は典型的な古武士的風格のある武将で、もうこの後ああいう人間は種切れになるだろう」と語ったという。

およそ 100 年前、日本はロシアと戦った。国力差約 8 倍、常備兵力１５倍の大国に挑戦したのだ。どう考えても無謀な戦争であった。窮鼠猫を噛む崖っぷちの状況から国家と日本海を守る為に、国家存亡の危機として戦われた。ロシアが狙うのは満州から朝鮮半島、そして日本であることは誰の目にも明らかであった。

日露の国力の違いを画いた風刺画

陸軍はロシアに勝ったが、正確には負けずに済んだと言うべきであろう。皮一枚のところで踏み止まったのである。結局、沙河会戦・奉天会戦は完全主義で重箱の隅をつっつくような性格の軍事官僚であったクロパトキンの極度な黒木恐怖症による戦略的な撤退によって、日本軍は多くの危機的状況の中で勝ちを拾う。いや負けずに済んだ。

では海軍は？

歴史は人によって作られる。戦争も人によって行われる。日露戦争も当時の日本と日本人の姿への理解なしには語れない。明治という時代を背負い、死に、または生きぬいた男達の物語が日露戦争という歴史なのだ。歴史学が単なる流れや経過を学ぶのであれば、味のない食事をしているようなものだ。故に今回から人物を浮き上がらせ乍ら背後の歴史を眺めていきたい。

平成 27 年 9 月 25 日

志雲会塾長　有馬正能